吉井勇全集

第七巻

番町書房

吉井勇全集　第七巻　随想　随筆
昭和三十九年三月二十日発行
定価一、六〇〇円

著者　吉井勇
東京都千代田区二番町二

発行者　大島秀一
東京都千代田区二番町二

発行所　番町書房
電話東京（二六二）六六五八
振替東京　一五八四四

印刷　大日本印刷株式会社
製本　株式会社　昇栄社

落丁・乱丁はお取替えいたします。

© 1964 T.YOSHII　printed in Japan

身辺雑記

人生孤独 二　自嘲 三　禁酒と遺債 五　人の一生 六　歯痛哲学 八　流転生活 九　詩と信念 一一　流離文学 一三　名花 一四　逸題 一六　民謡雑感 一七　鯉と蟹 一九　旅の悲しみ 二一　「柿二つ」その他 二三　「英雄待望論」 二四　「春泥」愛読 二五　「赤穂浪士」 二七　「蘆花全集」懐旧 二九　若き日のことども 三一　虚子の近業 三三　歌行脚 三四

市井夜講

立見 三五　落語研究会 三六　台水擅那 三八　円馬の「景清」 三九　落語私見 四〇　或る日の小せん 四四　馬楽の句 四七　俳諧水島記 五〇　詩妓 五三　小せんの手紙 五四　馬楽の詩 五五　懶虎堂主人に送る文 五七

酒客列伝

序 六一　中沢臨川 六一　押川春浪 六三　坂本紅蓮洞 六五　高梨俵堂 六六　中村秋湖 六六　片岡平爺 七〇

耽々亭劇談

劇場の追憶 七一　感傷四題 八〇　「大菩薩峠」を観る 八四　「国姓

爺合戦」を観る　八六　「坂本竜馬」を観る　八七　「坂本竜馬」の芝居　八九　読者と観客と　九〇　孫悟空　九一　「二人のオリイフェル」　九三　「金玉均」その他　九五　喜劇所感　九六　夜の断想　九七　二人の作家　九八　写楽の絵　九九　悲劇喜劇　一〇〇　或る対話　一〇三　「嬰児殺し」を観る　一〇三　小山内氏の改作　一〇四　池田氏の新作　一〇五　小山内薫氏を悼む　一〇六　「忠義」の悲壮味　一〇七　「牛山ホテル」を読む　一一〇　断層　一一一　沢田正二郎君を悼む　一一一　「唖の旅行」と「忠臣蔵」　一一三　築地小劇場の分裂　一一四　真山氏に遇ふ　一一六　小林一三君　一一八　柿紅を憶ふ　一一九　或る対話（再び）　一二一　高田雅夫君を悼む　一二一　「西山物語」を観る　一二三　小山内薫全集に就て　一二六　小山内氏死後　一二九　魂の入れ替　一三一

傷心抄

わびずみの記　一三三　春待つ心　一三六　春日籠居　一三九　昨日今日　一四六　筆のまにまに　一五〇

奈読美曽乃書

癡人の言葉　一五六　続癡人の言葉　一六〇

渓鬼荘記

結廬の記　一七一　海南雑記　一七九　韮峡雑記　一八五　続韮峡雑記　一九一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

渓鬼荘雑記　一九八　渓鬼懺悔　二〇五

走馬燈

人さまざま　二一九　夏の蝿　二二二　淡泊仮屋漫筆　二二六

相聞居歌話

粢前独語　二四二　山峡消息　二五一

洛北随筆

愚庵の歌　二五五　鴨東竹枝　二五八　萱野君の手紙　二六〇　左団次の芸骨　二六二　鞍馬山　二六五　接骨木　二六七　洛北新秋　二六九　面壁独語　二七二　残燈抄　二七九　比叡颪　二八一　京の霜　二八二　鴨川石　二八三　師走旅情　二八四　病円馬　二八八　去年今年　二九二　旧友　二九五　春琴抄其他　二九六　小せんの唄　三〇〇　小山内氏追憶　三〇二　深淵の魚　三〇七　幽方歌集　三一二　鏡花先生追憶　三一五　秋江回顧　三一七　菊の歌人　三一九　祇園冊子　三二二　太平楽　三二六　映画散策　三三一　映画漫歩　三三三　洛北日記　三三五　京洛点描　三四七

聖戦篇

伯方壮士　三五八　北支画信　三五九　土佐男児　三六〇　傷兵の歌　三六二　歌法師　三六三　防人の歌　三六五　陣中吟　三六七

京洛篇

懐旧　三六九　おあさ　三七一　幟の音　三七三　朱雀日記　三七四　秋深く
三七五　小夜千鳥　三七六　秋の心　三七八　土鈴　三七九　京饌寮　三八〇
比叡山　三八二　洛北消息　三八三　祇園会　三八五　嵯峨　三八七　句仏
三八八　老桜　三九〇　瓢亭　三九一　洛北散策　三九三　春硯　三九四　夢二
の絵　三九五

回顧篇

高輪の家　三九七　遠き日　三九八　かへらぬ夢　三九九　蘆荻抄　四〇〇
啄木　四〇一　鎌倉日記　四〇三　凡骨　四〇四　鴻の巣　四〇五　新佃　四〇六
浅草の友　四〇八　松助の印象　四〇九　両国の秋　四一一　鐘の音　四一三
馬楽　四一四　置炬燵　四一五　華奢の果　四一六　林間閑吟　四一八　渓鬼
荘　四一九　酒麻呂　四二一　亡友　四二三　病中口占　四二四　地獄草紙
四二五　土佐閑居　四二六　冬日読書　四二八　蜥蜴　四二九　蜻蛉　四三〇
猪野々行　四三三　炉端　四三三　観潮楼　四三五　杏花追憶　四三六　我鬼
の歌　四三七

鑑賞篇

大観の芸術　四三九　芋銭河童図　四四一　愚庵の句　四四三　松の葉　四四四

「土」を観る　四四五

相聞居随筆

相聞居随筆　四四八　杏花忌　四五三　懐旧の一夜　四五七　祖先を語る　四六三　渓鬼荘を思ふ　四六七　放庵素描　四七一　歌人放庵　四七四　渓仙の随筆　四七七　画人の句　四八〇　泥鰌の弁　四八五　李長吉　四八七　写真の思ひ出　四八八　秋成の言葉　四九〇　顔見世　四九三　鴨　四九四　墓碑銘　四九五

わが回想録

少年時代　四九七　旧い友達　五〇一　パンの会の人々　五〇七　青春回顧　五一三

解説　木俣　修…五一七

第七卷

随想　随筆

身辺雑記

人生孤独

私は近来、人生は結局自分一人だと云ふやうな孤独感に襲はれることが、だんだん激しくなつて来た。それはむしろ人間共通の哀傷的感情だらうと思ふけれども、しかし近頃の私のやうに、日夜人生孤独の情に堪へないでゐるのは、如何にも故人蝶花楼馬楽君か、或はこれも世に亡き柳家小せん君あたりの、落語家的厭世観の祟りではないかと思ふ。馬楽が好んでよく高座に乗せた「ちきり伊勢屋」の主人公の如きは、一見楽天的であるやうであつて、実はかう云ふ市井芸術家の厭世観の中から生れた憫れむべき一個の運命論者に過ぎない。と同時に私も近来、この「ちきり伊勢屋」の主人公と相似の点があるのを発見して、慄然たらざるを得ないのである。「ちきり伊勢屋」の主人公は、自ら棺桶の中に入つて「生葬ひ」をやるが、私も近頃時時さう云つた慾望に駆られることがある。それも自己嫌悪と云つたやうな浅はかな心持からではなく、激しい孤独感から来る慾望なのだから遣り切れない。それで時に依ると格別深刻な考へからではなく、故人蝶花楼馬楽君をいささか追憶するやうな心持で、

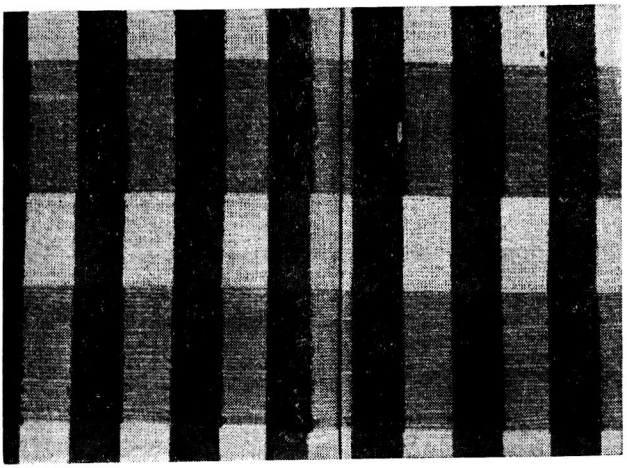
「馬楽のやつ、高座であんなことを云つてゐやがつたが、成る程考へて見ると生葬ひつてやつも洒落てゐるな。」

と云ふやうな気になつて、うかうかと「ちきり伊勢屋」を実演して見たいやうな誘惑を感ずることがあるのである。

が、さうは云ふものの、結局私はまだ命が惜しい。功名心や利慾やにもやや恬淡になつて来た今日、別にこれと云つて野心や希望がある訳ではないが、それでも平凡長寿を希ふ念はかなり深い。むしろ人生孤独の感が深くなればなつてゆく程、生命に対する執着は、だんだん強くなつてゆくやうな気がするのである。私は十年ばかり前、まだ雑誌「人間」が世に在つた時分、拙作市井劇「小しんと焉馬」の中で、盲目の落語家小しんをして、かう云ふことを云はしめたのを覚えてゐ

る。

「つまり人間てえものは、何処まで往つても一人ぼつちなんだ。一人で生れて一人で死んで往くんだ。（徐かにゆつくりと）一人ぼつち――たつた一人で死んで往く――こんな怖ろしいほんとのことが、又と世の中にあるだらうか。なあ、おい、これがほんとのことともしたら、人間位寂しいものはねえぢやあねえか。」



昭和10年発行『娑婆風流』表紙

が、この言葉は今では、単に私の戯曲中の一人物の言葉ではなくなつてしまつて、現在生きてゐる作者――即ち私自身の現実の声となつて来てしまつた。事実孤独感ほど怖ろしいものはないのである。

ところが二三日前この文芸欄を見ると、三上於菟吉君が「文学打明話」の中で、日本の文士は今孤独になるのが、よい文学へのための義務だと云ふやうなことを書いてから、ゴオリキはたつた一人で悩みたつた一人で苦しんで万人の苦悩を代表するところまで漕ぎつけたと云ふことを付け加へてゐる。

せめて私の孤独も、冀（ねがは）くはそこまで往つて貫ひたいものだが。

自嘲

私はこれまで断然禁酒を誓ひ、いまだ旬日ならざるに戒を破るやうな陋態を、幾度繰返して来たであらう。いい年をして銀座裏あたりの酒場で酔ひ知れてゐるところを、「木馬は踊る」子などに見付けられて、飛ん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だゴシツプ種にされたりすると、慚愧悔恨人生頓に暗澹たる心地がして、唯今のお笑ひ草では済まされないやうな気持がすると同時に、憤然としてもう酒盃の如き汚らはしきものは、生涯手にしまいと決心する。が、三日経ち、五日経ちするうちには、だんだん生きてゐることの寂しさに堪へられなくなって来ると同時に、何時の間にかカクテルグラスを前にした、「文芸春秋」所載文壇戯詩百篇中にあるお化布袋然たる自分の姿を、何処かの酒場の隅に見出すのである。

しかし私はかう云つて自嘲の言葉を弄するものの、本来はそれほど不真面目な人間ではないと信じてゐる。第一私は極めて臆病で弱気である。「一押し二金」と云ふやうな或る道の格言めいた言葉があるが、私には「押し」もなければ「金」もない。従つてもう今では可なり長い過去を振り返つて見ても、そこには唯私自身の淋漓たる酔態があるばかりで、諸行無常の感のみがいとど深い。

思はず愚痴めいたことを書いてしまつたが、しかし私はこの間歌舞伎座で上演された「西鶴一代男」を見て、あの世之介のやうな「押し」の強い、「金」にも不自由のない男の好色的生涯も、結局は寂しく果敢ないものだと云ふことを知つて、幾分慰められたやうな心持がした。池田大伍君の脚本は、西鶴の原作「好色一代男」とは、可なり違つたもののやうに思はれたが、それでも西鶴の無常感やユーモアは、巧に舞台の上に写し出されて、観てゐるうちにもいろいろ考へさせられることが多かつた。が、全体を通じて私の胸を打つたものは今も云つた通り人の一生は、結局寂しく果敢ないものだと云ふことだつたのである。

「西鶴」には私は一時かなり心酔して、「好色一代男」や「本朝二十不孝」の現代語訳を春陽堂から上梓したり、「鳥羽港漂流奇譚」や「夢介と僧と」のやうに、材を「二十不孝」や「一代男」に取つた戯曲を書いたりしたこともあつた。しかし今となつて顧みると、それ等はみんな慚愧に堪へない仕事ばかりで、「西鶴」に対して申訳のないやうな気がしてゐる。今度の歌舞伎座では、池田氏新作の「一代男」の外に一番目として近松原作の「博多小女郎浪枕」を小山内薫氏が改作したものを上演してゐるが、近松や西鶴のやうな完成した原作に依つて、改作若くは新作をすると云ふことは、いづれにしても難事である。小山内池田両氏の如き、現今の劇壇では、これほど適才はあるまいと思は

れるやうな作家の手腕をしても、猶且舞台を観てゐるうちに、仄かに原作の匂ひを懐かしく思ふやうな場合が、全くないとは云へなかつた。

自ら嘲るの辞を書かうと思つてゐるうちに、話が何時の間にか外へそれた。これで見ると私もまだ「劇壇」なるところに、些か未練があるらしく思へる。

禁酒と遺債

友達へ出した手紙の端(は)しに書いた文句が、はからずも新聞に発表されたために「禁酒」の宣言をしたやうな形になつて、見事自縄自縛に陥つてしまつた。わが事ながら痛快に感じられるが、それと同時に自ら播いた苦悩の種を、如何したらいいかと思つて迷つてゐる。薄志弱行あはれむに堪へたる次第ではあるが、やつとそれから旬日を過ぎたる今日、私の「禁酒」も「絶対」から「原則として」程度に軟化して来たことを告白して置く。

私はこれまでに幾度「禁酒」をしたか知れない。事実宿酔(ふつかよひ)の頭重く胸は深い憂鬱に閉ざされ、思ふことおほむね感傷に過ぎるやうな時は、如何にしてこの暗澹たる現世苦から逃れることが出来るだらうかと思つて、激しい悔恨の情にむち打たれながらも断然「禁酒」の決心をするが、憐れむべし酔狂洛陽の酒徒、二三日経つともう何時の間にかその苦痛を忘れてしまつて、俗累の煩多きを憂ひ、債鬼の門に群がるを嘆いて、つい杯を手にするやうな気になるのである。それだからこれまでの私の経験によると、「禁酒」の期間の最も長かつたのは約八ケ月、最も短かつたのには二日若しくは三日といふやうなのがある。蓋し「禁酒」といふことは、宗教上の信仰的節制によるか、或は肉体上の自然拒否によるの外は、殆ど不可能といつてもいい位永続性に乏しい。

それで私の今回の自縄自縛的「禁酒」も、改めて「原則として」といふ位の程度にして置きたいと思ふ。「絶対」といふ言葉は、余りに非人間的なつめたい感じがして面白くない。「原則として」といふ言葉は、多分の妥協性を持つてゐてどこか余裕があると同時に、明るいユーモアをさへ含んでゐる。この間或会に出席して、酒を飲まずに杯を伏せたままでゐると、向ひ側にゐた某先輩から、

「おい、君。酒を飲まないといい歌が出来なくなる

ぜ。」

と云はれたが、実は私も心ひそかにさう思つてゐたところなのである。が、私は今後ずつと「原則としての禁酒」は続けてゆくつもりでゐる。

「禁酒」のことはこの位にして、もう一つ私の身辺近事について書いて置きたい。それは外でもない雑誌「騒人」天運投機号に掲載された、永松浅造氏の「遺産成金物語」の中に、私の名が最近の遺産成金の目星しいものとして挙げられてゐることである。永松氏はいふ。

「父君は莫大な生命保険が付けてあつたので、これも遺産として有難く頂戴したさうである。金持になると、金が惜しくなるさうだが、この頃はとんと浮名も聞かなくなつた」と。

亡父は元来金銭に淡泊な、むしろ好んで貧を楽しんでゐるやうな人物だつたから、死後に遺された負債の方が、遥に産を凌駕してゐた。勿論莫大な生命保険などが付けてあらう筈がないから、結局私は「遺産」どころの騒ぎではなく、「遺債」を負つて苦しんでゐるのである。お蔭で世相のある一面を観察することが出来たから、今度ひとつ「債鬼」といふ題の戯曲でも書いて見ようかとも思つてゐる。「債鬼」の中には、なかなか面白い人物がゐる。徹底的なところが愉快である。

人の一生

アンドレエフの戯曲に「人の一生」といふのがあつて、その中の恋愛の場を有楽座において、文芸座第何回目かの公演として、守田勘弥と林千歳とによつて演ぜられたのを観たことがあつたが、私はいまだにその芝居の面白かつたことが忘れられないでゐる。アンドレエフのその戯曲はまだ大分長いもので、内容はその題名の示すが如く、生れるから死ぬまでの「人の一生」を、やや象徴的に戯曲化したものである。

私もすでに人生の半を過ぎ、かなり長い過去を持つ身の上となつて見ると、多少回顧的な気持になつて、往時夢の如しといつたやうな感を抱くことが多くなつたが、さういつた時にいつも思ひ出されるのは、あのアンドレエフの「人の一生」の中に出て来る、「運命」を象徴してゐるかのやうに思はれる「灰色の人」の風貌である。

アンドレエフの戯曲「人の一生」では、各幕の幕切れ毎にこの「灰色の人」が忽然と影の如くに現れて、薄気味の悪い暗示的な独白を述べてから幕が下りる。が、私は近ごろこの「灰色の人」なるものは、唯アンドレエフの戯曲中に現れるばかりでなく、私の人生の行路にも、まるで道陸神のやうにその影の如き姿を現して、冷然として彳立してゐるのを発見するやうになつた。かういふと多くの人は、痴人白日の夢を語るものとして嗤ふかも知れないが、しかしこれは私の心の世界における事実であつて、要するにアンドレエフもその戯曲において「灰色の人」を、一種の神秘的存在として書いてゐるのである。それだから私が今ここで心の世界の神秘的幻影として「灰色の人」を語るのに、別に何の不思議もない。ところで、どうして私は近ごろ、この気味の悪い「灰色の人」をしばしば見なければならないやうになつたのであらうか。それは畢竟私が近ごろ「運命の力」といふものを、深く信ずるやうになつて来たからなのである。

元来私は少年時代から妙に「運命」といふやうなことを考へる神秘癖があつた。それは今考へて見ると、少年時代に読んだ国木田独歩氏の小説「運命論者」その他の影響の結果のやうに思はれるが、しかしださういつた読書から受けた性癖ばかりでなく、私の享けた人間的素質の中に、多大の神秘性が含まれてゐたといふことも事実である。回顧して見ると私のこれまで過ごして来た半生は、いつも狭霧のやうな神秘の影に蔽はれてゐるやうな気がして、ちよつと寂しいやうな憂鬱を感ずる。

で、今度私が「運命の力」といふものを深く信ずるやうになつたのは、要するに少年時代から持つてゐる神秘癖から来た結果に外ならないのである。が、かばかり深くその力を信ずるやうになつたのは、去年の三、四月の候、長崎から雲仙嶽の方まで二ケ月に近い流離の旅をした時からのことで、それまで私は人生に対して何等の信念を持つことが出来ず、家庭的にも世間的にも、常に不平や不満はかなり感じてゐたのであるが、この長い遍路の如き旅をして以来、私の心境に著しい変化があつたことを、私自身はつきりと認めないではゐられなかつた。私は青の洞門を穿つた苦難の行者の如き喜びを感じた。

が、私は唯「運命の力」ばかりを信じ、それを恃んで生きてゐるものではない。私の胸裏には、「運命の

力」を信ずると同時に、「自己の力」に対する自信も、かなり強くなつて来たのを感じて、近ごろではこれまでになかつたやうな生甲斐のある緊張した生活をしてゐるのである。今でも屢々どうしようかと思ふやうな難関に逢着することがあるが、さういふ場合に微笑をもつて自分の行路を開いて行けるやうになつたのは、偏へに「運命の力」を信ずればこそであつて、その信念があるために「自己の力」も思ふさま発揮することが出来る。これまではただ薄気味悪くばかり思つてゐた「灰色の人」も、これが「運命」を象徴するものかと思ふと、だんだんある懐かしささへ感じられるやうになつて来た。わが人生の行路に立てる道陸神よ。冀くはこの嶮路に悩める旅人を、死に到るまで護らせ給へ。

人の一生は短いといふが、これはその人の使ひやう働きやうである。私は今後は「運命の力」を信じて勇猛精進、出来るだけ長く使はうと思つてゐる。その間には私の一生を賭してもいいやうな仕事が現れるだらう。

歯痛哲学

私はこの二三日歯痛のために、かなり憂鬱な日を送つてしまつた。そして私は歯痛が私の一生にどの位深い影響を与へてゐるかといふことを考へないではゐられなかつたのである。

かなり古い記憶だからほとんど忘れてしまつたが、たしかアンドレエフだつたかの小説に「歯痛」といふ短篇があるのを、誰かの翻訳で読んだことがある。それはキリストが十字架に懸けられる日の出来事を、歯痛に悩んでゐるある男が見物してゐたところを書いたものだと思ふが、事実歯痛はもつと小説や戯曲に取扱はれていいと思ふ位、人生に切実な関係を持つてゐる。

私は歯痛を覚え始めたのは、六、七歳の頃からのことだと思ふが、その時分のことを思ふと私の目に浮かんで来るのは、私を可愛がつて呉れた亡き大叔母の姿である。私はその大叔母の住んでゐた隠居所の縁側で、うづくやうな歯の痛みをこらへながら、本箱の中から探し出して来た草双紙の「北雪美談時代鏡」の絵にさびしく見入つてゐたことがあつたのを、今でもなつか

しい思ひ出として覚えてゐる。考へて見ると私はその時既に「歯痛」によつて、小山内氏のいはゆる「厭世の権利」を教へられたのである。

その後私は二十歳頃まで、ほとんど歯痛に悩まされ続けて来た。私が少年時代から強情我慢の「癇癪持ち」として、家庭的危険人物視されて来たといふことは、「歯痛」が私の性格に及ぼした影響の結果であつて、それがために私の人生観が、どんなに暗澹たるものになつたか知れないと思ふ。が、それは唯私の人生観ばかりでなく、私のこれまでにいくつか書いた、狂芸人俳諧亭句楽を中心とする市井劇にまで、暗い影を投げてゐるかと思ふと、「歯痛」の影響もまた大なりといはなければならない。そして私はただ自分の作品ばかりでなく、他の人々の作品——たとへば小山内薫氏や久保田万太郎氏の作品にも、かなりはつきりと「歯痛」の影響を見ることが出来るやうに思つた。

こんなことを書いてゐる時、私ははからずも沢田正二郎君の訃報を聞き、再び見ることの出来ない彼の扮したキリストの姿を心に描くと同時に、また古い記憶の中からアンドレエフ（？）の小説「歯痛」を思ひ出さずにはゐられなかつたのである。

流転生活

私は生れてからこの方、幾度転々として居を変へたか分らないくらゐである。今度また居を移したので、生々流転の感を新にした結果、これまで私の住んでゐた家の追憶にでも耽つて見ようかと思ふ。或ひは自己反省の一助となるかも知れない。

私が生れたのは芝区高輪南町五十九番地で、今味の素の鈴木三郎助の家となつてゐる。私が拙著「生ひ立ちの記」に赤坂見附上の公孫樹の木のある家で生れたやうに書いたのは誤りであつて、その平河町の家にはその後の幼年時代の三、四年を過ごしたものであるらしい。それからまた高輪南町に戻つて、そこで七年近くの少年時代を過ごしたが、中学の三年になつた時だから、私が多分十五の年のことだつたと思ふ、父は不図した蹉跌からこの高輪の家を人手に渡して、田端の先きの小台の渡しに近い、荒川の沿岸にある家に引つ込むことになつたので、私も一緒にそこに移つた。がそこにも一、二年ゐたばかりで、今度は芝区二本榎西町に移り、それからまた同じ芝の伊皿子に転じ、更に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com